

(4) 病

① 病の分類

鍼灸での治療では、病は先ず四つに分ける。

1. 太陽の病 (後ろの病)
2. 陽明の病 (前の病)
3. 少陽の病 (横の病)
4. 陰の病 (内の病)

1. 太陽の病

太陽の病は、体の後側に症状が出る病で、痛みが激しい。

人間の体は、背骨を境に後ろの筋肉で前の内臓を支えている(4足獣が内蔵を釣っていた名残)。この後ろの筋肉が凝り固まると、その間を通る感覚神経に何らかの悪影響を及ぼすためだろう。典型例は、座骨神経痛で、患側の尻中央の表面がベコベコで、奥に硬い痞りがある。

代表例は、上部は肩凝り、下部は腰痛。

急性の場合、ラクな姿勢で、先ず、経絡的に関連するに手足甲に引く。それから、患部に軽く刺鍼した後に、関連する陽経を出ているツボを探しながら末端へ。そして、治療を終える前に動いてもらい、痛い(動かしにくい)一歩手前で止まってもらい、引っかかる所に刺鍼すると、関節可動域が広がる(動作鍼)。仕上げに、関連する陽経の手首足首より先に引くとよい(肩→手陽経、腰→足陽経)。

2. 陽明の病

陽明の病は、体の前側に症状が出る病で、ツボが浅く、熱が高く、動きが速い。

邪気が顔や前頭部に突き上げる上衝を伴うことが多い。

精神症状が出やすい。実することの方が多く、比較すると陽性の精神症状が多い。が、虚すこともあり、陰性の精神症状も出る。「高きに上がって歌い、衣を棄てて走らんと欲す…一人戸を閉じ窓を塞いで居る」素問経脈編。

代表例は、更年期障害、疝の虫、熱射病。不眠は、太陽の病と陽明の病の合病が多い。

邪気を散らし下げることと、手早い刺鍼が大切。腹の虚があれば補す。

山谷に強めに引き鍼した後に、前頭部の熱い所を散鍼し、また、手陽明経に引く。

3. 少陽の病

少陽の病は、体の横側に症状が出る病で、ツボが深く、変わりにくく、再発も多い。

逆に、軽くても治りにくい病は、少陽にツボを探す。

代表例は、脇痛、目眩、耳の病、喘息やアトピーなどのアレルギー疾患。呼吸器系の疾患を伴うなら、肩胛骨外側縁(肩貞付近)にツボ(横から肩胛骨と肋骨の間に向かって押す)。

4. 陰の病

陰の病は、体の内に症状が出る病で、全ての病は、陰の病の要素を持つとも言える。

陰の病は、経絡で分類するよりも、上焦、中焦、下焦の上下横輪切りに分類した方が分かりやすい。

病が動かないときには、上焦は邪気、中焦は水毒、下焦は瘀血(食毒も)が多い。重さに因るのだろう。濁醜を思いだすとよい。

手足に引き、背に引き、邪毒を少しずつ減らしていく。また、腹に虚で冷のツボがあれば、腹への灸も効果大。

陽(太陽,陽明,少陽)の病も急性期を過ぎたら、陰の病からの影響を考え、腹を整える治療と組み合わせる。すると、再発を防げるし、体全体の生命力が増す。急性の病は、体が発する危険信号、養生を促すサインと考える。

5. 古い病

古い病は、体の境目にツボが出やすい。少陽は、前後の境なので、古いことが多い。

他の病でも古くなると、少陽位や、手足と胴体の境目、上下境界の横隔膜の辺り、左右の境目である任脈や督脈の近く(背中側の華佗経、腹の腎経)にツボが出る。

初めは、歪んだ体に掛かる付加を、筋肉の最も太い1行線の辺りで支えるので、そこにツボが出るが、だんだん、そこでは支えきれなくなり、その脇で支えるようになるからだろう。